
静かなお別れ

鈴木一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かなお別れ

【Nコード】

N0800X

【作者名】

鈴木一郎

【あらすじ】

最近明花の様子がおかしい。そう感じた春樹の前に、死んだはずの明花の親が現れる。明花の父親の口から、春樹に衝撃の事実が告げられる……。

「春樹君。明花は……既にこの世にはいないんだよ」
恋人を取り返そうと奮闘する少年の物語。

さらば愛しき女よ

卯月明花の力は強大だ。それは、日常を少し楽しくするために、彼女に与えられた新たな力なのかもしれない。

無論、彼女は知っていた。その力は、何かの対価になっていることを。

そして、ある日悟った。自分に残された時間は少ないと。無論、死にたくはない。だが、これは運命なのだ。そう考えた彼女は運命を静かに受け入れた。

だが、心残りなことがあった。恋人のことだ。彼女の恋人、弓月春樹は、何としても彼女が一人で逝こうとするのをやめさせようとするだろう。明花にとっては嬉しくもあり、同時に悲しいことでもあった。

だから、彼女は決意した

違和感

弓月春樹の第六感はよく当たる。

当たると言っても、宝くじや福引きはおろか、年賀状のお年玉くじにすら当たったことがない。当たるのは、大概嫌なことに限る。今回のケースもそうだ。

明花の様子がおかしい。

突如変態的なプレイを好みだしたというわけではないし、夜な夜な一人遊びに出掛けるというわけでもない。ただ、違和感を覚えるのだ。明花が明花であって、明花でないような　そんな違和感だ。「どうかした？　春樹」

その声に春樹は我に返った。見上げると、鞆を持った明花が不思議そうにこちらを見つめている。

「え？　ああ、いや、なんでもない」

春樹は慌てて立ち上がると、鞆を手を取った。二人揃って教室を出る。その背中に、クラスメイトの葛城が大声を浴びせた。

「明花ちゃん！　今度喫茶店行こうよー！」

「また今度ね」

まただ……と春樹は違和感を覚えた。一挙手一動、彼女が変わったところはない。だが、何かが違うと第六感が彼に告げるのだ。

だが、明花が明花以外の何かになるなど、考えられるはずもない。春樹はそのことを言い出せずに、悶々とした日々を送っていた。

「……春樹？」

明花の声に、再び我に戻る。春樹は曖昧に頷きながらやや歩幅を広くした。

明花のことで気になることがもう一つある。それは、明花が全く『力』を使おうとしないことだ。

以前はちょっとしたでも気に障ることがあったら、春樹に対し『力』を行使していたものだが、最近はそれがまったく無くなっている。

どういう心境の変化だろうか。

春樹はあることに気づき、歩みを止めた。

……まさか、力が使えなくなったのか？

春樹は別に、明花が力を使えようと使えまいとどうでもいいと思っていた。彼が彼女に告白した理由に力することは一切関係ないからだ。むしろ、彼女のことを考えると、喜ばしいことなのかもしれない。

だが……それならばなぜ、彼女はそれを俺に伝えてくれないのだろうか？ 春樹はそれが理解できなかった。俺を心配させたくないということなのだろうか、それとも、何か他に理由でもあるのだろうか。

わからない。わからない。わからない……

「……あんたちよつと変よ？ 大丈夫？」

どうにかあるのはお前の方じゃないのか、と春樹は言ってやろうとしたが、やめた。曖昧に頷き、明花とゆっくりと前進していく。

「悩んでることがあつたら相談しなさいよ」

「ああ……そうだな……」

結局春樹は、疑問を口にすることができなかった。ぎくしゃくとした日々が数日続いた。

ミスキャスト

その日明花は葛城の元へ遊びに行くということで、春樹は一人だった。日ごろの寝不足を少しでも解消しようと思えば昼寝をした。

妙な夢を見た。明花の後ろ姿を必死になって追う夢だ。追いかけても、追いかけても、彼女の元へたどり着くことはできない。待つてくれ、と叫ぼうにも声が出せない。目覚めは最悪だった。布団が汗をたっぷり吸いこみ、重たくなっていた。

「畜生……なんだってんだ」

春樹のやり場のない怒りは、壁へと向けられた。

ピンポン、とチャイムの音が鳴り響いた。春樹は立ち上がると、パジャマを脱ぎ捨て、スラックスとワイシャツに着替えた。ぼさぼさの髪を掻き上げながらドアを開ける。

「はい、どちら様で？」

「……久しぶりだね。春樹君。立派になったものだ」

呼吸が一瞬止まった。

門についているインターフォンの前に立っていたのは、紛れもない、明花の父親だった。

「……何故貴方が生きてるんです」

「受動と能動を間違えているな、春樹君。生きているというより、生かされているといった方が正しい。……いや、生き返らせられた、という方が正しいのかな？」

明花の父親は苦笑しつつ、上がっていいかと尋ねた。春樹は彼の無言の圧力に屈するかのように、彼に道を譲った。正確に言えば、あまりにも予想外のことに脳が処理できないで、ついていけないのだらう。

リビングのソファに紳士らしい物腰で座ると、どこから話そうかと明花の父親は帽子を取り、白髪の混じった頭髪をゆっくりと撫でつけながらうそぶくように天井を見上げた。春樹はポットに入って

いたお湯を使って、珈琲を淹れた。春樹が座ると同時に、一口啜った彼は、少しだけ目を見開いた。

「……美味しいな」

「淹れ方にコツがあるんですよ」

「ぜひ聞かせてもらいたいものだ。向こうでおいしい珈琲を飲むために」

「向こうとか、生き返らせられたとか、一体どういう意味なんですか？」

「……他でもない。明花のことだ」

「……明花がどうしたんです？ まさか……死んだとか言わないでしょうね」

春樹は肩をすくめた。先ほど見た夢がただの悪夢であってほしいという願いもあったから、わざとおどけるように言ったのだが、明花の父親は全く笑っていなかった。春樹は喘ぐようにもう一度言葉を紡いだ。

「そんな……まさか……まさか明花は……」

「そうだ、明花は死んでいる。既にこの世にはいないんだよ。春樹君」

春樹は立ちあがった。その勢いで椅子が転倒したが、春樹は気にも留めなかった。

「冗談はやめてください」

「冗談などではない。私が娘の死亡報告を好き好んでやると思うかね？ 私が今言ったことは紛れもない事実だ。そして、明花の最後の力によって私は生き返らせられた。全てを、君に話すために、だ」

「……じゃ、話して下さい」

春樹は荒々しく息を吐き出しながら言った。明花の父親は頷くと、ゆっくりと話し始めた。

祈り

卯月明花の力。それは、彼女自身もよくわかっていない。もしかすれば、幼少期を孤独に過ごした彼女を憐れんだ神が与えたものなのかもれないし、はたまた悪魔の囁きに耳を傾けた彼女が、羽をむしり、原形を留めぬほど踏み潰して蟬を生贄にささげた、その取引の結果かもしれない。真相は常に闇の中だ。

ただ、一つだけわかっていたのは、彼女にはあまり長い時間は残されていなかったということだ。聡明な彼女は、幼いころからそれを悟っていた。弓月春樹という恋人ができてから、その不安はますます大きくなった。

自分は何時か、春樹よりも先に旅立たなくてはならないということとを、彼女は何よりも恐れていた。そして春樹が、それを承知しないであろうことも、またよく知っていた。

どうすればいいか。彼女は毎晩、悩み続けた。春樹の前ではいつもと変わらぬ態度をとりつつ。力を使って、自分の寿命を延ばす。そんなのは論外だった。どれだけ便利な力であっても、人を傷つけるといったことは勿論、自分の寿命などには影響を及ぼすことはできなかつた。

どうすればいいか。悩んだ末、彼女は一つの結論に達した。

それが、もう一人の明花の誕生である。

「…………つまり、明花の恋人である君なら気づいていたと思うが、ここ数日の間の明花とそれ以前の明花は別人だ。数日前からの明花は以前の彼女から記憶を引き継いでいるものの、やはりそれは『知識』として知っているだけであって、現実に彼女自身が体験したわけじゃないから、勿論ある程度差異は出る。そして、最大の差異は……」

「明花と違って力が使えない、ということですか」

「その通りだ。最も、以前の明花も最期の方ではほとんど力を行使できなかつたがね……」

「ちょっと待って下さい。明花の力は人を蘇らせたりすることは不可能なはずだ。何故貴方が生き返ったり、もう一人の明花を誕生させることができたんです？」

「質問は一つずつしてほしいものだが……答えよう。まず第一に、私が生き返ることができたのは、私の寿命は君に明花のメッセージを伝えるまでだからだ。第二に、明花は無から魂と身体を作り出したわけではない。明花は自分の身体をもう一人の明花に譲り渡した。そして、魂はすでに彼女の中にあっただよ」

「まさか明花は……妊娠してたんですか？」

「そういうことだ。だからもう一人の明花、という呼び名は正しくない。正しくは、君と明花の子供だ」

春樹は次々と明かされる事実に愕然とした。無論、学生の身分で彼女を妊娠させていたことも大問題ではあるが、明花が二人いたとは。

「お話はよくわかりました……ですが、ですが何故、明花はもう一人の明花、いや、俺達の子供を生み出したんでしょう？」

「恐らく、時間稼ぎだろうな」

明花の父親は珈琲を再び一口啜った。

「時間稼ぎ？」

「そうだ。君に、自分が死んだことを悟られないようにするためと、もう一つ。自分のことをいつまでも忘れてほしくなかったのだろう。そして、矛盾しているようだが、今の明花と自分が別人であることにも、きっと彼女は気付いてほしかったのだろうな」

「……俺が明花の恋人だから、ですか？」

「そうだ」

明花の父親はゆっくりと椅子から立ち上がった。音もなく立ち上がり、滑るように床を歩く。何気なく彼の足元に視線を下ろした春樹は叫びそうになった。明花の父親の足が消えかかっているのである。

「さて……私が知っている事実、伝えなければならぬ事実は全て

伝えた。最後に、明花からの伝言だ。

『春樹、あんたと出会えて本当に良かった。私は幸せだったよ。もう私はいないけれど、もう一人の明花と仲良くね』……以上が、明花からだ」

言い残すと、明花の父親は彼に背を向け、再び滑るように玄関に向かって歩き出した。

「待って下さい」

その言葉に、彼はゆっくりと振り返った。

「俺は何としてでも、明花を取り戻します」

明花の父親は少し目尻を下げた。そして、ふつと微笑んだ。

「君が明花の恋人だったことを誇りに思うよ。だが次は、新しい明花と仲良くやってくれ。それが、彼女の願いだ」

「俺は認めません。確かにあの子は明花そっくりです。だけど、明花じゃない。明花はあいつであって、あいつ以外の誰でもない。教えてください。どうすれば、明花を救うことができますか？」

明花の父親は視線を前方に戻し、そしてもう一度肩越しに春樹を見据えた。

「……行ってみるしかないだろうな。死者の国に。明花はその最深部にいる。戻ってこれないかもしれないが、覚悟はできているかい？」

「……当たり前です」

「それならば……ついてきたまえ」

明花の父親は春樹に向き直ると、右手を差し出した。つられるように春樹が彼と握手を交わすと、途端に激しい動機が彼を襲った。彼はがっくりと膝をつき、床に崩れ落ちた。

卯月明花が帰った時には、弓月春樹の心肺は完全に機能停止していた。

迷宮の……

むせ返るようなチューリップの絨毯の中で、春樹は目が覚めた。

「気づいたかね？」

「……ここは……死者の国ですか？」

「そうだ」

「何故こんなに大量のチューリップが？」

辺りを見渡してみると、視界の端では小川が静かに流れており、そこにはさらに先へと続く小さな橋が架けられていた。その橋の先には、風車が巨軀を優雅に回転させていた。

「死者の国は、どんな形にもなりうる。その人間が最も美しいと思うような風景に変わるそうだ。君が見ているのはオランダかもしれないが、私には東京駅前の雑踏が見える。私の生きがいは仕事だったからな」

明花の父親は自嘲するように呟き、笑った。春樹はその言葉が嘘だとすぐに見抜いたが、何も言わなかった。否、言えなかった。悲愴感あふれるその姿を見てしまっただけ。

「さて、君にはあまり時間は残されていない。早く行くでしょう」

「このの一体どこに、明花はいるんです？」

「それは、君が一番よく知っているはずだ」

明花の父親は肩越しに春樹を見つめた。春樹はすつと目を細め、回想した。

ここには来たことがある。一年前、明花と付き合いだしてから、春休みにここへやってきたのだ。実際にオランダに言ったのではない。オランダ風の造り売りしているところへ出かけたのだ。そして、ここは最後の方に訪れた場所だった。

確か明花は、最後にシアターを見たが……。春樹はゆっくりと歩き出した。

「行きましょう。お義父さん。こっちです」

明花の父親は頷くと、小走りで駆け出した。先ほどは消えかかっていた足は、しっかりと見えていた。

チューリップの海をモーゼのように割って、ひたすらに進み続ける。ここではどんなに走っても息切れを起こすことはなかった。十分ほどして見えてきたのが、小さな劇場だった。春樹の記憶の通りだった。

「……ここか」

「はい。明花は最後に小さな劇場で行われていたシアターを見たがつていたんです」

「……私には七十年代の若者が好みそうな喫茶店に見えるよ」

明花の父親は再び笑った。七十年代と言えばインベーター・ゲームが流行った頃だ。机型のゲーム機でも置いてあったのだろうか。春樹は肩をすくめて扉をゆっくりと開いた。

「待ってましたよ、春樹君」

「あなたは……誰だ？」

黒い和服に身を包んだ、まだ十代前後の青年が、真っ暗なシアターの舞台上に一人立っていた。彼にはスポットライトが一つ当てられ、さながら役者のようだ。

「一応、死者の国を支配する神、ってところですね」

「じゃああなたはハデスか？」

春樹の言葉に、青年は苦笑した。

「一応ここは日本ですよ、春樹君？ ギリシャ神話の神と混同されたくないな」

さて、と自称神はゆっくりと近づいてきた。春樹は思わず身構えた。

「立ち話もなんですし、座りませんか？ とびきりのお茶をご馳走しますが」

「その必要はない」

明花の父親が春樹を庇うように前に出た。今まで見せたこともないような目つきで神を睨みつける。

「あんたはそう言って時間稼ぎしようとし、あわよくば春樹君をこの世界の住人にしようとしている。私は自分の娘の恋人までもが死ぬのを見たくはないんでね。さっさと明花と元の世界に帰らせたまえ」

ばれましたか、と悪びれもせず神は笑った。

「じゃあ僕とゲームして、勝ったら明花を連れて帰っていいですよ」

「……ルールは？」

「簡単なことです。僕を殺すこと。それができれば、連れて帰っていいですよ」

自称神は、にやりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0800x/>

静かなお別れ

2012年1月2日07時50分発行